

現象学を語る

本特集は、現象学はいかに語られるかという観点から企画しました。

特集は2つのセッションからなり、まず「現象学とグラウンデッド・セオリー」は、対談とディスカッションで構成されています。

この対談は、本誌48巻2号(2015)にて、昨年発刊された『現象学的看護研究—理論と分析の実際』(松葉, 西村編, 2014, 医学書院)をめぐって山本則子氏(東京大学大学院)より寄稿いただいた「研究ノート」が契機になっています。この中で山本氏は、グラウンデッド・セオリーとの類似と相違という観点などから、看護研究における現象学について論じられています。そこで、本書籍の編者である西村ユミ氏(首都大学東京大学院)とともに、それぞれの立場から議論を一層深めていただきました。この対談には、両氏のもとで学ぶ大学院生にも参加いただき、「ディスカッション」という形で、“若手研究者”としての立場からそれぞれのお考えを示していただいています。

もう1つは、本年8月8日に首都大学東京にて行なわれた、臨床実践の現象学会第1回大会より、大ラウンドテーブルディスカッション「一緒に『現象学』する」の模様をお届けします。本学会はこれまで、西村氏主宰のもと「臨床実践の現象学研究会」として、看護学研究者を中心に哲学者、社会学者、人類学者など領域を越境しながら、現象学について多角的な議論が重ねられてきました。そして本年より学会として、一層充実した活動がめざされることとなりました。

大ラウンドテーブルディスカッションは、3つのテーマから構成されています。特集ではこの各発表を講演録の形で、また村上靖彦氏(大阪大学大学院)は講演原稿を掲載いたします。なお、発表後には充実したディスカッションも行なわれたのですが、残念ながら紙幅の都合により割愛いたしました。

現象学とは何か。質的研究とは何か。そしていかなる知の創出がめざされるのか。2つの「語り」を通じて、考えていきたいと思います。

『看護研究』編集室